

「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～

▶ Vol.8 保護者同士がつながれる場

この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろいろな人が語りあっていきます。

今回のメンバーは5人です。杜ちやいど園の保育者である大竹さん、城田さん、保護者である平田さん、山下さん。そして、研究者である久保健太です。
全2回、本号は2回目です。



「園庭 1」



「ぐんぐんカーニバル」

(構成：久保)



つながれる場

久保 杜ちやいど園でやっている「パパパワールランド」というのは？

大竹 あるNPO法人が「人力遊園地」というのをやっていて「それをやってほしい！」って、平田さんにお願ひしたら、なんと！「パパパワールランド」なんてすてきな名前になってですね。それで保護者のお父さんたちを集めて、その人力遊園地をやってくれたんですよ。やったのはいんどだけど、すごく疲れちゃって、懲りちゃった人もいて。(笑)

平田 パパが活躍する場ってなかなかないです。その後にはプレイデイ(運動会にあたるもの)でもパパで動いたりして。やっぱりそうやって1個のものを乗り越えると、かわりやすさみたいなのは出てきますね。

山下 つながりを求めているパパも多いですよ。

大竹みどり 杜ちやいど園(神奈川県横浜市)園長。
平田真大 杜ちやいど園保護者。
久保健太 大妻女子大学家政学部児童学科専任講師。

城田 龍 杜ちやいど園保育士。
山下晃平 杜ちやいど園保護者。

平田 そうなんですよ。なので、その壁を突破してあげるといふか、言われたから行くよ、というようなスタンスにしてあげる。

その入りやすい環境っていうんですかね。大人になると子どもみたいに、さっととはならないから。(笑)

山下 考え方、みんな違いますからね。距離感あんまり気にしない人と、気にする人と。

平田 そのの尺度がいろいろありますからね。

城田 大人は特に肩書きを気にする人が多いから、それを取っ払っちゃえば、人として話せるんですよ。そのきっかけをつくる作業、いわば肩書きを取る作業を、平田さんは大事にしてくれているから、「平田さんだったら行くよ」って人も多いだろうし、「平田さんになら頼める」ってこともあると思います。

平田 そこは同じ「親だから」っていうところを強調するしかないかな。やっぱり仲良くなるにはどこかしらの共通点を探りながら。

だから子どもに帰れるのかもしれないですね。それで子どもを楽しませたという満たされた感もあって。一人では楽しませられないですけど、みんなでだったらあれだけの人を楽しませられるという自信につながるというか。

大竹 小学校に行くとなかなかつながりがないにくくて、だからこそ、この中でつながりをもつて、何かあったときにそこで聞けるとか、そういうのって保育園の役割なのかなって。

かさまの杜(姉妹園)では、「一日保育士体験」っていうこともやってもらってたんです。そうすると、参加したお父さんたちは「すごく良かった」って言われる。「しこたま疲れました」はもちろん最初。「もう帰りたい」って言っていたり、昼に帰るお父さんとかもいて、「また起きた頃、来ます」なんて人もいたり。

平田 それって面白いですね。ここの施設をお借りして一緒に遊べるというのは。普段の保育の様子をどうしても見られないので。

大竹 皆さん見たいんだよね。やつぱりね。

平田 他の子とのかかわりをね。動画じゃなくて、のぞくような。

久保 わが子を見てても、園でのほうがお利口さんなんですよね。家だと、きょうだいげんかばっかりしてるんですよ。だけど、園にお迎えに行ったときなんかは、他の子も交えたりして仲良く遊んでいて。先生方に何うと、「今日は〇〇を手伝ってくれました」とか、「落ちていた〇〇を拾って畳んでくれました」とか、とか、そういったことを伝えてくれる。家とは違って、園では立派にやっているんだというのを聞いて、安心できます。

城田 わが子の様子を保育場面の動画で見ても、現場の空気感を味わうことには勝てませんよね。動画では、場面を見ることはで

きるけど、場面を感じられない。その場に居れば、「いろいろな出来事が到来して、保育場面が動いていくんだなあ」ということがわかる。やつぱり子どもと同じ場で感じてみるっていうのは大事なので、ぜひ、そのような機会を設けたいですね。そういう話はしょっちゅうしているのですが、やつぱりコロナ禍が……。セパレートするのが正義みたいな風潮が強くなって。

つながるきっかけづくり

山下 園で作ってくれたカレーを園庭で食べるってやりましたよね。コロナで集まれないけど、やろうって。あれ、すごい人数集まりましたよね。

大竹 130人くらいね。

山下 その中には意外な人がいたのかな？

大竹 そうなんですよ！ 意外な人が「手伝います！」って来てくれてうれしかった。

城田 中には配膳を手伝ってくれて、卒園児のお子さんに配るのを任せて、「持っていつて！」ってやってくれるご家庭もあつて。席も家族ごとにしなくて、もちろん家族ごとのこじんまりとした場所もあつたんですけど、10人掛けとかのテーブルも用意して。

久保 そうすると相席になった家族同士、交わらざるを得ないですよ。

城田 そうそう。子どもがこぼしたら「あゝ」って言いあつたり。そういうのも見られたりして、面白かつたですね。

大竹 カレーのイベントは、ずっと「やりたい、やりたい」って城田さんと言っていたのね。それでも、なかなかできてないことがいっぱいあるんですけど。

城田 1個、形になりましたね。それも、保護者の方の実家が農業をやっていて、そこからジャガイモとかを大量に持ってきてくれたりして。職員の方でも、大竹さんと僕が2人

で突発的に企画したのに、片付けとか、手伝いに率先して入ってくれる人がいたり、普段の保育では知らない、意外な一面が見られたり。

大竹 本当に意外だったね。片付けがうまくと思つたら、居酒屋でバイトしてらつて。

園として何かをするって考えるときに難しいのが、参加してくださる方はいいし、「私はいいわ」って言っている人もいいんだけど、そうじゃなくて、参加している人の周囲にいる人。

平田 入りたいけど……みたいな人ね。

大竹 この人たちが疎外感みたいなものをもつてしまうと「アウト」なので、そこが難しいところですね。

城田 そういう人はグイッとこつちが引つ張つてしまうと、逆に遠くなつてしまう。加減が難しいですよ。

大竹 その気持ちの碎き方って課題だよ。

そっちにも気持ちに向けておかないと。

久保 それぐらいの距離感の人が、カレーだったら足を運べたって感じなんですか？

大竹 そうですね。コロナのこともあるので、来そうな人が来ないって場合もあったかな。だからいろんな会をやるのが本当はいいのかなって思うんですけど。

山下 そういうときの基本って、キャンプのときもそうなんですけど、要は、淡々と継続的に企画を立ててみんなに発信していただくっていうのを心がけています。来られる人だけ来てくれればいいって。1回行かなかったから行きづらくなったりっていう空気感を出さないようにね。ちよつとお茶飲んで、みたいなレベルの5分、10分企画から、ガツツリなものも含めてあれば。人によってタイムイングとかもいろいろあるじゃないですか。仕事に忙しいとか。

大竹 だから昨年度、城田さんがここでたき

火をやってくれていて、そこで、お茶していきませんか？ とか、マシユマ口焼いていきませんか？ とかやると、案外ね。おとなしい方も「いいんですか」って言ってマシユマ口焼いていたりして。その積み重ねかな。

多様な人とかかわれる規模感

平田 普段仕事をやる上で、初対面の人とどうかわかっていくかっていうところを結構考えています。

大竹 それって保育園でも重要ですよ。

久保 今、平田さんがおっしゃったことは、組織論の中でも第一歩のところが必要なんですよ。

平田 やっぱり対面がいいってなったときにコロナ禍になって、会えなくなったり。じゃあWEB会議ではどうやるのかって。

久保 平田さんも普段の仕事は、計画性や緻密さを求められる仕事ですよ。保育の仕事

は逆に曖昧さが必要な仕事ですよ。役割分担も、明確にし過ぎるとうまくいかない。

大竹 確かに。保護者の方はどちらかというと、平田さんのような業界にいる方が多いのに、杜ちやいると園はそうじゃない。もうちょっと保育園側もちゃんとしなくちゃいけないですけど、なんせ、ちゃんとが苦手です。私が。

平田 普段の仕事は、仕事の規模が大きくて、役割分担が明確過ぎて、やる人にしか仕事が行かなくなっちゃうし。悩ましいですね。

大竹 どこも規模感なんだね。

久保 役割分担の明確さと曖昧さを時と場合によって使い分けるためには、規模感ってすごく大事なんですよ。

山下 僕が以前勤めていたところだと、急に従業員が増えて、50人を超えると急にマネジメントのやり方が変わるんですよ。要は哲学が伝わらなくなったりして。

大竹 そうね。哲学が伝わらないってあると思う。保育園の組織も、保育園だけじゃダメだと思っていて、いろんな職種とかかわることが大事だと思う。

平田 そっちのほうが言いやすいですね。

大竹 そうなの！ 相談しやすい。

平田 なかなか言えないことが言えたりとかありますからね。

大竹 だからね、保護者の人とも、もつとつながれるといいんだけど、あんまりつながった感を出してしまうと、そこに入っていない人たちが疎外感をもってしまう。それは申し訳ないので、そこら辺をどうしていくかっていうのがね。園としては課題。

城田 山下さんが先ほどおっしゃっていた、一回一回を小さく継続的にやっていく、というのが鍵かもしれないですね。

(2022年4月16日杜ちやいると園にて)

— 終わり —